

「祭り」のおはなし

瓢湖に残る白鳥

歩里



かつて私は祭りの主役であった。祭りは賑やかで解放的な記憶しかない。そんな私が祭りの裏方になってから二年がたった。裏方は祭りの当日だけ働けばよい、というわけでない。半年にわたる準備が祭りを成功に導く。遙かシベリアから戻ってくる仲間たちが安心してくつろげる寢床を見つけ、えさ場となる田んぼを選んでおく。その点、瓢湖は最高の楽園だ。その分、ライバルも多い。だから私は春に仲間たちがオホーツクの空に旅立った後も瓢湖に残り、瓢湖とその周辺を監視している。仲間の白鳥たちにとって私の仕事は重要なのだ。

ただ戻ってきた仲間たちから聞こえてくるであろう武勇伝を想像すると息が詰まりそうになる。ときどき視界が狭くなることさえある。特にあいつの自慢話を聞かされると思うだけでうんざりする。あいつ、与一は今頃澄み切ったシベリアの空を大袈裟に旋回しているだろうか。

瓢湖に冷たい風が強く吹く日が続くようになってきた。

「そろそろ仲間たちが戻ってくるな。」

私は瓢湖上空で幾度か旋回し、田んぼの巡回にでかけた。

夕方、巡回から戻ると、人間から餌をもらおうとする白鳥が目についた。やつらが悪いとは思わない。間違った生き方ではない。彼らも彼らなりの苦悩がある、はずだ。ただ私にはできない。やつらから視線をそらし、空を見上げた。分厚い灰色の雲が空を覆っていた。もう澄み切ったオホーツクの空を飛ぶことはないだろう。だが私が白鳥であることにはかわりはない。私の仕事は重要なのだ。

翌朝、分厚い雲が消えた。五頭連峰から差し込んできた朝日が湖面から靄をあぶり出した。瓢湖は幻想的な輝きを放っていた。ぶるつと身震いがした時、まだ薄暗い北の空から鳴き声が響いた。

「戻ってきた。」

仲間たちは上空を幾度か旋回し、次々と舞い降りてきた。シベリアではあどけなさが残る顔つきだったであろう若い鳥たちも生意気

なくらいの精悍な顔つきになっている。知っている仲間たちも次々と舞い降りてきた。私も精いっぱい笑顔をつくり彼らを迎えた。

全ての鳥が舞い降りた後、白鳥たちの大合唱で祭りが始まった。長い緊張から解放された鳥たちは私が用意したえさをついばみ、瓢湖の水面をかけていった。祭りも中盤に差し掛かると、若い鳥たちは神輿に見立てた棧橋の周りで踊り続け、夫婦は長旅の集団生活から離れて二人だけの世界に浸っていった。

それでも私は私の仕事を黙々とこなしていく。周りを小まめに飛び、少しの危険も見逃さない。仲間たちもそんな姿をたたえ最大限の称賛を与えてくれる。けれども危険を乗り越えた者にしか与えられない達成感の前では、どんな称賛も私の心には響かない。

そういえば与一が来ないな。いつもなら真つ先に武勇伝を伝える来るはずなのに。私を避けるように離れていた知り合いの白鳥を捕まえ、与一のことを尋ねた。嵐を偵察に行くと行ってオホーツクで

はぐれたとのことであつた。

「はぐれた？あいつが？」

他の鳥たちにも聞いたが、それ以来ずっと見ていないとのことであつた。

「後から来る仲間と一緒にだとよいのですが。与一さんとは親友でしたからそれは心配でしょう。」

「親友？特に親友というわけでは……」

「またまた。与一さんはシベリアでもあなたのことをよく話していただきましたよ。」

「私のことを？」

「シベリアに飛来できないあなたのために、お土産話を持って帰るのだとね。」

「……」

「そうそう、怒らないで聞いてくださいいね。いつだったか、若い鳥たちがあなたの頑固さを少しからかったのですよ。翼を傷めて飛べ

なくなつて、ますます頑固になつたとね。そうしたら、与一さん、本気で噛みついちゃつたのですよ。アイツが見つけた寢床やえさ場がどれだけ大切なのか分かつているのかつて。アイツがどんな思いで瓢湖に残り、そして祭の準備をしているのか分からないのかつて。もう止めるのが大変でしたよ……」

私は仕事場を離れた。瓢湖はいつのまにか雲に覆われていた。ポツリ、ポツリと分厚い雲が雨を吐き出しはじめた。

私の気持ちを与一は分かかつていた。でも与一の気持ちに私は見向きもしなかつた。そもそも私は私自身と向き合うことを避けていたのかも知れない。裏方の仕事に求めた誇りで、現実の姿と対峙する怖さを覆い隠していたのだ。ありのままの自分を受け入れ、解放することができれば、賑やかな祭りの輪に入れるかもしれない。

湖面を駆け上がり、久しぶりに上空で大きく旋回した。翼に痛みを感じたが、もう一度、北の空に向かって大袈裟に旋回してみた。

大きくバランスを崩し、そのまま瓢湖に落ちていった。

「やっぱりオホーツクを飛ぶことはできないな」

驚いた表情で見ていた仲間に笑いながら話しかけた。

祭り会場に向かう途中、北の空を見上げた。与一なら大袈裟に私を笑ってくれたのだろうな。でもその笑い声を二度と聞くことはできない。そう思うと分厚い灰色の雲がキラキラとにじんできた。

作品に
まつわる
ご紹介



瓢湖

五頭山が紅葉で色づきはじめるころ、瓢湖に冬を告げる使者、白鳥たちがやってきます。白鳥の湖。瓢湖はそう呼ばれています。三千キロ以上の空を渡ってきた白鳥たちは、湖でつかれた羽根をやすめ、えさをとり、鳴きかわします。優雅でほほえましい様子を、私たちは間近で見ることができません。

瓢湖で冬をすごした白鳥たちは、湖畔の桜のつぼみがふくらみはじめるころ、ふるさとのシベリアへ向けて飛び立ちます。

オオハクチヨウ、コハクチヨウなど六千羽近くの白鳥が飛来する瓢湖は、国の天然記念物に指定されています。また、十種類を超える多くの水鳥の飛来する貴重な水辺として二〇〇八年ラムサール条約による保護地に登録されました。

問合せ先：〇二五〇一六二一六九〇（瓢湖管理事務所）

八十 幸せを咲かせる金魚

後藤 夏実



むかし、新発田のお祭りの金魚屋の屋台に小さな紅白色の金魚がいた。その金魚は体が小さいために、いつもひとりぼっちだった。お客さんたちも、その金魚には、見向きもしなかつた。ある、お祭りが一番にぎやかな夕暮れ時のこと。一人の老人が金魚屋に立ちよって、店主に声をかけた。

「この金魚、見せておくれ」

「じいさん、そいつは小さくて、いい金魚じゃないよ。他のにしたらどうだい」

老人は静かに首をふって、店主にいった。

「この子をもらおう」

店主は何もいえずに、金魚をビニールのきんちやく袋に入れて、老人に渡した。空はすっかり日が暮れて紺色だ。老人は屋台がならぶにぎやかな商店街を歩いた。老人が歩くと、きんちやく袋も一緒にゆれる。老人は金魚にいった。

「たしかに、お前はいい金魚じゃない。しかし、今のお前は花のつ

ぼみだ。必ず、美しくなる日がくる。名前は、ハナにしよう。ハナ。これからは、私と一緒にくらししておくれ」

こうしてハナは老人と一緒にくらし始めた。老人はハナの金魚鉢を縁側の窓辺においた。そこからは、商店街が遠くに見えた。老人はいつもハナの隣にいた。そうして老人は、自分が若い頃の話をよくハナ聞かせた。

「今日はパリに行った話しをしようか」

老人は何十年もむかし、絵描きをしていた。老人は絵を描く道具と少しのお金で、世界中を旅したという。そうして旅をしていた先のフランスのパリで、青年だった老人は、永遠の愛を誓う女性に出会った。

「彼女は美しかったさ。金色の髪も青い瞳も何もかもがね」

そうして老人はその人と日本で結婚式をしたといった。とても幸せな話のはずなのに、なぜか、話おわった老人は悲しそうだった。老人が悲しそうだったので、ハナは少し寂しい気もちになった。そう

いえば、ハナは老人のお嫁さんを一度も見たことがなかった。

ハナが老人とくらし始めて何年かすぎたある日のこと。老人はハナの絵を描いた。じつとハナを見ては、ちよつとずつ絵を描く。一日中、老人はそれをくりかえした。老人が絵を描き終えたのは、空がすっかり真つ赤になった夕方になってからだ。老人は絵が見えるように金魚鉢に絵を向けていった。

「ごらんハナ。これが今のおまえの姿だ。体も大きくなって、色も鮮やかになった。ハナ、今のおまえは、花よりも美しい金魚だよ」
老人が持っている絵の中には、一匹の美しい金魚がいた。その体は大きく立派で、赤と白のうろこは、光をあびて輝いていた。

『これが私。私の姿……。ありがとう。ありがとう、おじいさん』
ハナは言葉にならない声でそういった。ハナは、ここまで立派に自分を成長させてくれた老人の隣にいられることが、なによりも幸せだった。ハナはずつと老人と一緒にいたかった。しかし、それは無理なことだということも、知っていた。

ハナが老人とくらし始めてから、もう十年がすぎた。今ではハナは、ほとんど動かない。金魚鉢の底でじつと静かにしている。今夜、また新発田の商店街ではお祭りパレードが開かれる。ハナは縁側から見るパレードが大好きだった。夜のパレードのために少し眠っておこうと思つて、ハナは目をとじた。すると、遠くから自分を呼ぶ声がある。目を覚ますと、金魚鉢に、ハナの知らない女の人がうつつていた。髪は金色で、瞳は青かった。女の人はいった。

「ハナ、神様に会いにいきましょう」

けれど、ハナにはどうしても見たいものがあつた。ハナが何度も何度もお願いすると女の人はいった。

「わかつた。けれど少しの間だけよ。ハナ」

夜、縁側の老人の隣には空っぽの金魚鉢があつた。老人は何年も前に描いた金魚の絵を持って静かにパレードを見ていた。

「ほら、見えるか。お前の好きなパレードだ」

老人はふと、通りすぎていく台輪の一つに目をとめた。紅白の大

きな金魚が台輪の上で、まるで生きているかのように動いている。新発田名物の金魚台輪だ。老人は、その金魚の姿に十年間ずっと一緒にくらししてきた紅白の美しい金魚の姿を重ねずにはいられなかった。老人はいつた。

「なぜだろうなあ。まだ隣にお前がいるような気がしてならないよ。もしもまだ、そこにいるなら聞いておくれ。この十年の間、私は幸せだったよ。ありがとう。ハナ」

そのとき、老人の横を小さな風が通りすぎた。その風にさそわれたかのように、老人のほほに、一すじのなみだが流れた。

それは、とても星の美しい夏の夜のことだった。

作品に
まつわる
ご紹介



金魚台輪きんぎょだいわ

毎年まいとし八月の二十七日から三日間つづく新

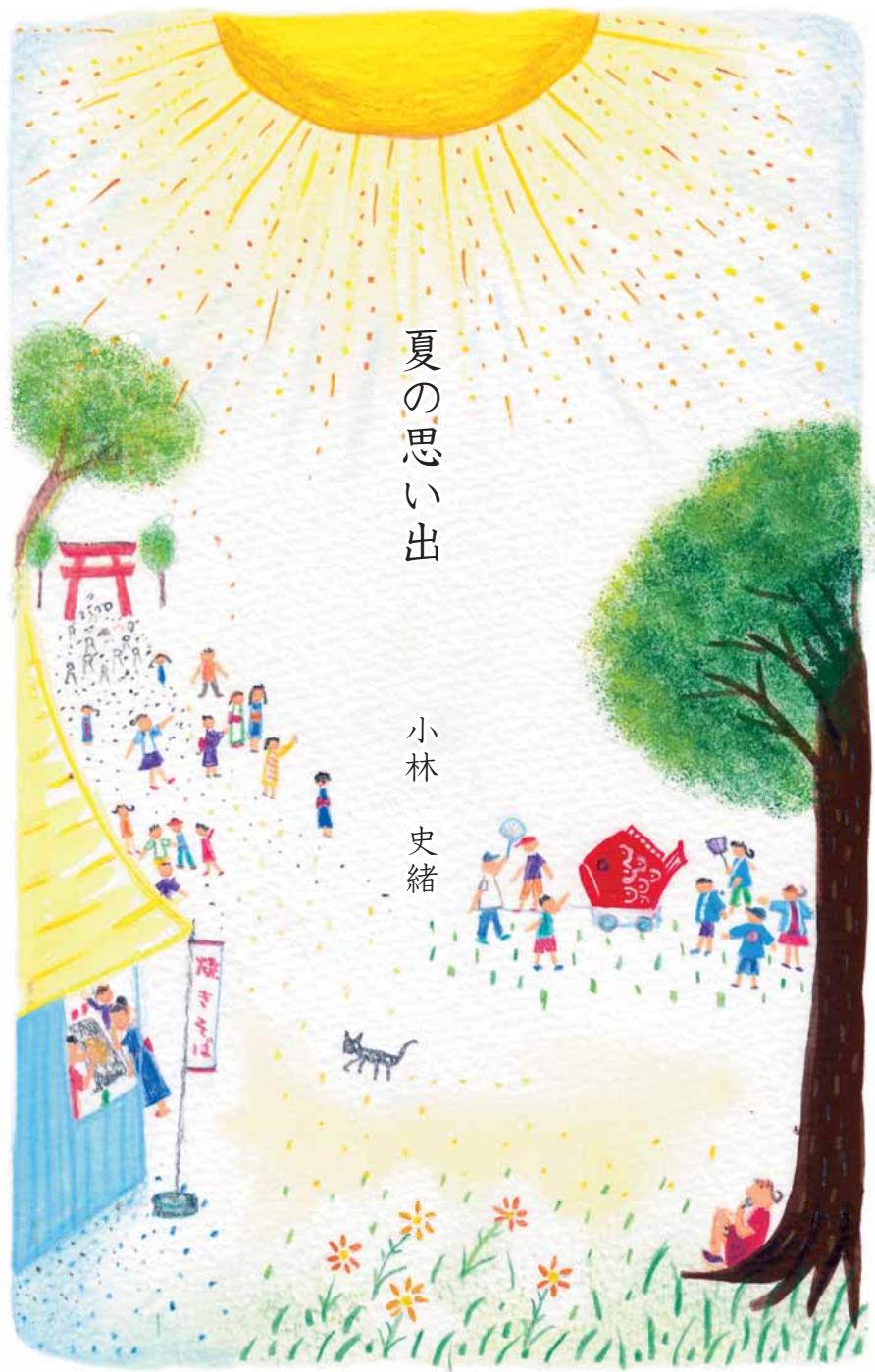
発田まつりが近づくと、大きな金魚があらわれ
ます。各町内かくちやうないの子どもたちがひく金魚

台輪です。金魚台輪は竹や紙で形がつくら
れ、目やうろこ模様もようをかきいれられた金魚
を車輪しゃりんのついた台の上に乗せたものです。

「わっしよい。わっしよい」祭りばんて
んを着たいせいのかいかけ声の子どもたち
にひかれ、金魚はひれを動かしながらまち
の中を泳いでいきます。

金魚台輪は、明治の中頃に考案されたと伝わる郷土玩具で、小さな子ども
が、夏の夕暮れに、車の付いた金魚の形のぼんぼりにろうそくを灯して引き
まわして遊びました。まつりに登場する大きな金魚台輪には、各町内ごとに
さまざまな趣向が凝らされています。

問合せ先・〇二五四―二六一六七八九（新発田市観光協会）



夏の思い出

小林 史緒

「ケイは変わりもんだよ。せつかく新発田に帰ってきたんだから祭りくらい行けばいいのに。」

母は、襖を細めに開けてそう言うのと、私の返事を待たずにぴしゃりと閉めた。今日は新発田祭りの初日、八月二十七日。けれど、中学校は始まっている。九月初めには体育祭もあるし、テストもある。本当は来たくなかったが、母が「もしかしたらじいちゃん、今年が最後の夏だから。」などと言うので、しぶしぶついてきた。

新発田には母の実家がある。小学校までは新発田にいたが、中学校に上がると同時に新潟に引っ越した。私は新発田の祭りにいい思い出がない。小学校の頃は毎年、金魚台輪を引かされた。大人のかげ声にあわせて炎天下を歩き回った。子どものかけ声が小さくなるのと、とても叱られた。休憩所の木陰で食べる冷たいアイスだけが楽しみだった。

「どこもこんな時期に祭りなんかやらないよね。もう夏休み終わってるのに。」

母が閉めた襖に向かって独り言を言うと、

「諏訪神社の本家の祭りがこの頃だから、それに合わせてるんさ。御射山祭りというんだ。長野県の諏訪神社の祭りだよ。」

後ろからじいちゃんの声が出た。ここは、じいちゃんの居間兼病室だ。家の中で唯一ここだけにクーラーがある。じいちゃんの身体のためだ。じいちゃんは今何年も病気で入退院を繰り返して、今はほとんど寝たきりだ。孫が私一人のこともあって、小さい頃からとても可愛がってくれた。だから、夏にこの家に来ると、私はどこよりも涼しく居心地のいいじいちゃんの部屋に居座っていた。今日もじいちゃんの寝ている布団の横に寝そべって、好きな作家の本を読んでいた。

「祭りは行ってなんぼだぞ。」

「そういうじいちゃんだって、祭りには行かないじゃない。」

「祭りのけんか台輪のほうは好きじゃない。だが、奉納台輪は風情がある。夜が白く明けてくる頃にクーラーを止めてそこの窓を開け

る。そうすると、ぎいつ、ぎいつと台輪がきしむ音がこの部屋に聞こえてくる。見えるわけじゃないが、音だけで横になっていても祭りの朝だなあって感じがする。あれがいい。」

「そうかなあ、私には暑いつていう思い出しかないけどね。」

「それも祭りの思い出の一つだよ。ケイにとつて今に大事な思い出になる。なあ、じいちゃんが小遣い出すから、ちよつと屋台で焼きそばを買ってきてくれ。食べてみたいんだ。」

「食べられるの？ じいちゃん。」

私はびっくりしてじいちゃんを見た。治療の薬がどんどん強くなつていて、その副作用でじいちゃんは味を感じなくなっていた。何かを食べたいと言わなくなり、この一、二年でもものすごくやせた。

「まあ、いいからさ。」

そう言うと、じいちゃんは枕の下から小銭入れを取り出すと五百円硬貨を私に渡した。

「しょうがないなあ。」

私はそれを持って外に出た。たちまち暑い空気がクーラーで冷えていた腕を刺した。ああやだやだ。そう思いながら祭りの屋台が広がる神社前におもむろに足を運んだ。

屋台の始まる場所に決まって出ている綿菓子屋の前まで来ると、人混みから突然、声がした。

「ケイ、久しぶり。」

見ると、六年生のときに同じクラブだった子が二人、手を振っていた。懐かしい顔に手を振り返すと、向こうは手を振りながら走り寄ってきて「あっち。あっち。」と指さした。指さされた方向を見ると、三年間同じクラブだった子が浴衣姿で手を振っている。二人、三人といつの間にか、人混みの中に知った顔が見え、諏訪神社の鳥居をくぐる頃には、十人以上になっていた。「懐かしいね。」「今、どうしてる？」を繰り返し、自動販売機で買ったジュースを手に話し込んでしまい、頼まれた焼きそばをじいちゃんのところを持って帰る頃にはすっかり日が暮れていた。持ち帰った焼きそばをじい

ちゃんほんの一口だけ食べると、大きなため息をついた。

「味、分かる？ それ、食べられる？」

「心配ない。記憶の味で食べてるから。それより、ケイ。祭りに行つて良かっただろう。台輪を引いたりするだけが祭りじゃない。懐かしい人や思い出にまた会えるのも祭りなんじゃないかい。」

「他で祭りをやってないから、みんな新発田の屋台に集まるしかないし。」

私のへそ曲がりな答えに、じいちゃんは微笑みながら、もう一口、何の味も判らないはずの焼きそばを口に入れた。そして、

「ケイに焼きそば買ってきてもらったことは、じいちゃんにとって大事な祭りの思い出だよ。」

と、心に刻むようにゆっくりと飲み込んだ。

作品に
まつわる
ご紹介



● 新発田まつり

新発田まつりは、朝早く、六つの町内の台輪が諏訪神社を目指す「奉納台輪」ではじまります。台輪が集まった神社の境内には、出店が並びとてもにぎやかです。

三日間つづく祭りの最後を「帰り台輪」が締めくくります。それぞれの町内へ帰っていく台輪が、勢いを競って、「あおり」という、前の車輪を上げては下す動きをくりかえします。その勇ましさから、「けんか台輪」とも呼ばれています。

新発田まつりの台輪は、享保十一年、六代藩主溝口直治の、諏訪神社の祭礼に飾り人形屋台を出すようにとおふれにはじまるといわれています。一つしかない前輪が特徴の三輪の新発田の台輪には、激しい「あおり」に耐えられるよう先人の技が巧みにほどこされています。

問合せ先：〇二五四―二六一六七八九（新発田市観光協会）